

## “世界”と“自分”を確認する

山本 聖子（美術家）

私が幼いころから育った場所は、“千里ニュータウン”という1970年の大阪万博に伴って開発されたニュータウンだ。それは当時、“未来都市の象徴”であっただろうし、そして現在も、高層マンションが立ち並び、生活に必要とされるものは全て完備された、何不自由ない便利で美しい、落ち着いた街である。

しかし私はこういった街の様相に違和感があった。人々は与えられた場所で与えられた方法で同じように生活し、“プライベート”や“個性”は極端に守られ、人間が生きているなら生じるであろう“手ざわり”のようなもの、“におい”のようなものが全く感じられないのである。目の前の世界は、どこを取っても無機質で、均質化しているように思われた。私はそんな風景の中で、五感が麻痺し、自分自身の存在が稀薄になっていくかのように感じられた。

私の制作の根底には、このような身体への焦燥感がある。つまり、作る過程で素材のディティールを知ることや、単純作業で身体を繰り返し使うことは、私にとって“世界”と“自分”の存在を確認するための、最初の方法であったと言える。

そして今は、自分の身体そのものを世界の中に放り込み、そこで生きてみることによって、やはり同じように“世界”と“自分”を確認している。そこから生まれる表現は、呼吸のように、あるいは風景画のように、目に映る世界や他者を反映しているに過ぎない。しかし「私にはこう見える」と晒していくことが、私を生んだ社会に対する問いになると信じている。

2014年12月01日

展示作品（会場入り口より）

### からっぽの色

2016年      映像(24分40秒)  
40名分へのインタビューを抜粋したインタビュー記録

—— “からっぽ”という言葉聞いたとき、何色を思い浮かべますか？ ——

この質問によるインタビューを2014年から（現在も継続中）様々な国の街頭でおこなっているが、この抽象的で、あるかないかもわからないような問いや答えに思いを馳せる人々の表情を見ると、改めて心が自由に放たれたような気分になる。そして彼らは、それぞれの「からっぽの色」を答えているようで、その答えの背景には日々の生活や、土地の文化や歴史、宗教などが関係しているのではないだろうか。私にとって「からっぽの色」は「白」だった。そこには、これまで生きてきた「私なりの日本」があるのだろう。私にとって他者の様々な「からっぽの色」を知るとは、「世界の多様性」という言葉が指し示すものが、どんなものかを知る最初の方法である。

### きみの内に潜む色

2016年      サイズ可変  
ガラス水槽・映像・泥・プロジェクター・他

歴史に目を向けると、人間は様々なに交差してきたことを感じる。特に文化にまつわるものは、海や陸を移動し、様々な土地や民族に影響を受けながら複雑に混じり合って形成されてきたものが多い。本作品に登場する人々の背後には彼らが分解されたとも言える色光がたゆたうが、それらも果てしなく交差する旅路を経て、さしあたって今、彼らのもとへと辿り着いたのかもしれない。

### 私の身体の一部は、私の生まれた国に行ったことがない。

2014～2015年      100×140cm(2点)  
メキシコにいた外国人国籍の人々の髪の毛、名前と国籍と滞在時間を記録した紙、額縁、他

メキシコでの滞在が半年過ぎたある日、自室で爪を切っていたときふと、爪の根元の部分はメキシコで生まれ、まだ日本に行ったことがないことに気がついた。当時私は常に「日本人」として生活していたが、こんなにも簡単に、身体の一部が他国で生まれることができるということに感動し、とても自由な気持ちになった。ここに貼られているのは、空港や語学学校、道端など、メキシコにいた外国人の髪の毛である。彼らは外国人でありながら、同じ土地で生まれた身体を持っている。

山本 聖子（やまもと・せいこ）

美術家2004年大阪芸術大学美術学科卒業、2006年京都造形芸術大学大学院芸術研究科修了。2013年度ポーラ美術振興財団の在外研修員としてメキシコシティに1年間滞在。その後2014年にオランダのレジデンスに滞在するなど国内外で活動。拠点は大阪の千里ニュータウンであるが、区画整理され均質化した街や人間、生活の在り方に違和感を抱き、そこを原点に人間の身体性や現代におけるアイデンティティの在り方について考察している。2011年TokyoMidTownAwardグランプリ、六甲ミーツ・アート芸術散歩公募大賞など受賞。  
http://www.seikoyamamoto.net

2004年に大阪芸術大学芸術学部美術学科立体コースを卒業、2006年に京都造形芸術大学大学院芸術研究科芸術表現専攻を修了した山本聖子（やまもと・せいこ／1981年京都生まれ）は、おもに彫刻・インスタレーション作品の発表により、2011年には六甲ミーツ・アート芸術散歩2011公募大賞受賞、Tokyo Midtown Award 2011アートコンペグランプリ受賞などで注目を集め、以後も積極的に発表に取り組んでいます。また、近年ではメキシコ（2013～14年）やオランダ（2014年）など海外へのレジデンスに積極的に参加しており、その作品も彫刻のみならず映像・インスタレーションへと展開しています。

ニュータウンで生まれ育った山本は、画一的にデザインされた都市空間と、その中にある不確かに揺らぐ自らの身体との違和感を覚え続けてきたといい、その不安や疑問に端を発したかのような作品を制作します。不動産チラシの物件間取りを切り抜き、ラミネートした後に再度切り抜いたピースを無数に接続し、圧倒的なサイズの面へと展開した『間取り図』作品は、無数の「画一」が集めた地平に、有機的で混沌とした美しさが潜むことを「探し・求めた」ものであるといえ、その探求は山本の感じる「都市と身体との不整合」を統合するための切実なものであったといえます。

また、2013～14年の海外でのレジデンスを契機に、この探求は個人的・平面的・物質的な視点から、様々な都市と人、その足元の大地や歴史などを含めた立体的な視点をもって展開されることになります。2015年のGallery PARCでの個展「白い暴力と極彩色の闇」において、これまで作品の大きな要素となってきた身体性や物質性のあいまいさは「色」という要素に重ねられました。我々にとって身近で、かつ実はその正体を規定しえない「色」を作品の要素としたことで、山本の個人的な違和感や探求は、鑑賞者にとって様々なリアリティで読み替え可能なものとなりました。水槽の中に入れた様々な色彩（染められた紙片）が混じり合い、次第に「闇」となる作品《 Darkness 》や、自身のパフォーマンスにより、世界地図の上に立てられたカラフルな無数の口ウソクが一斉に燃え盛り、黒く煤けた口ウが溶けて次第に世界を覆う様子を捉えた映像作品《 極彩色の闇 》などは、訪れた国々での山本の気づきや感覚から制作されたものですが、同時に鑑賞者にとっても様々な理解や解釈が可能なものになったといえます。ここに、山本の内なる感覚と外の世界がようやく重なり始め、作家の「探し・求め」は少し進められたとして見ることができます。

本展覧会「色を漕ぐ」は、「色」を手がかりとした近年の山本の取り組みを継続的に展開させるものとなります。これまで、世界を水面に浮かぶ色の様相として「見渡す」かのように捉えていたのに対し、「漕ぐ」という能動的な言葉が接続された本展では、自身を含めた様々な色が混じり合い、うねり対流する世界を「海」という塊と捉えるとともに、そこに飛び込み、漕ぐという意志を持つ「私」のあり方によって、ふたたび世界と自分の存在を確認するものです。

### 【山本聖子：今後の活動予定】

【展示】

展覧会：アッセンブリッジ・ナゴヤ2016『パノラマ庭園 ― 動的生態系にするす―』  
会 期：2016年9月22日(木) ～ 10月23日 （料金：700円）  
会 場：港まちポットラックビル（愛知県名古屋市港区名港1-19-23港まちポットラックビル）ほか、名古屋港～築地口エリア一帯

出展作家：オル太、遠藤俊治、徳重道朗、中尾美園、ヒスロム、山本聖子、下道基行など

主 催：アッセンブリッジ・ナゴヤ 実行委員会

現在開催中の「あいちトリエンナーレ2016」の連携イベントであり、名古屋の港まちを舞台にした音楽とアートのフェスティバル「アッセンブリッジ・ナゴヤ2016」に参加します。

【キュレーション/展示】

展覧会：『海流』（2会場同時開催による山本聖子キュレーション展）

会 期：【瑞雲庵】 2016年11月12日 ～ 12月11日（日） ※土日祝のみ開場  
【Gallery PARC】 2016年11月19日（土）～ 12月4日（日） ※月曜のみ休廊  
会 場：瑞雲庵（京都府京都市北区上賀茂南大路町62-1）  
Gallery PARC

出展作家：ロベルト・デ・ラ・トーレ、サンヒ・ソン、岩熊力也、山本聖子  
助 成：公益財団法人 西枝財団、公益財団法人 野村財団

京都市北区にある町屋・瑞雲庵と、GalleryPARCの2会場・同時開催で、山本聖子キュレーションによる「海流」をテーマにした展覧会を開催いたします。この展覧会は異なる国々（メキシコ、韓国、日本）から作家たちが京都に集まり、それぞれの文脈の中で日本や京都を見つめ、同時代を生きるものとして何を思うのかを探る試みです。オープンまでの間、私たちは意見交換の場としてオンラインで書簡（http://rrssforyokoto2016.tumblr.com/?og=1）のやりとりを行っています。そこには世界中の様々な場所から見た「今の日本」のイメージの断片がうっすらと浮かび上がると同時に、世界が多層的であることを物語るかのようです。私たちがここに集った偶然を、海流と重ね、各作家が見た何かを作品を通して鑑賞者の皆さまとも共有する機会になれば幸いです。